パルヴスの飢饉論(1891-92年)-「労働者民主主義論」の底流-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 伸一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7770

明治大学大学院紀要
第26集 1989.2

パルヴスの飢饉論（1891-92年）

——「労働者民主主義論」の底流——

PARVUS UND DIE HUNGERSNOT IN RUßLAND: 1891-1892
——EIN BEITRAG ZUR ANALYSE DER GRUNDLAGE SEINER "ARBEITERDEMOKRATIE"——

博士後期課程　政治学専攻61年入学
西　川　伸　一
NISHIKAWA SHIN'ICHI

はじめに

1891年から92年にかけて、ヨーロッパ・ロシアを襲った大凶作は、近代ロシア史上最悪の凶作と言われている。当該地域で飢餓線上をさまよった住民は、実に3千万ないし4千万にものぼった。ツァーリ権力がこれに強い衝撃を受けたことは、指摘するまでもない。だが同時に見逃せないのは、この大飢饉が、当時のロシアの革命運動にとって重要な転機となったという点である。すなわち、80年代の反動の時代には、革命的行動よりも「小さな善行」が必要だとしていたミハイロフスキーら古参インテリゲンツィアは、飢饉の窮状を前に、再びかつての社会的関心を取り戻し、他方、70年代生まれの若いインテリゲンツィアの多くは、これを機にマルクス主義を信奉するようになる[1]。その1人マルトフによれば、「1891年から92年の全ロシア的な大飢饉は社会民主主義運動の転換をもたらし、それ以降、社会民主主義運動は急速に発展する。」[2] 大飢饉で息を吹き返した革命勢力のエネルギーは、やがて1905年革命で頂点に達するのである。

この革命において「労働者民主主義論」なるロシア革命の構想を示して注目されたドイツ社会民主党（以下 SPD）員パルヴス（本名ヘルファント、1867-1924年）[3]を論ずるにあたっても、前記の大飢饉は無視できない。というのは、90年代、その左派の論客として名を馳せた彼の SPD 論壇における活躍は、まさしくこの大飢饉の分析に始まるからである。白ロシアのユダヤ人家庭に生まれた彼は、その頃、スイス留学を経てシュトゥットガルトで SPD に入党を果たしたばかりであった。しかも彼の飢饉分析には、のちの「労働者民主主義論」へと結実する萌芽的な論点と彼の革命に対する基本姿勢が看取されるという[4]。

「労働者民主主義論」については以前言及したことがある[5]ので詳しくは繰り返さないが、その骨

子は、ロシア革命をプロレタリア主導のブルジョア革命と規定し、その援軍を西欧のプロレタリアートに求めた点にあった。さらに西欧革命がロシア革命を支援することによって、ロシアでも社会主義への連続移行が可能としたのである。それはある意味で、トロツキーの「永続革命論」の先駆をなすものだった。そして、ロシアのマルクス主義者たちは、パルヴスの所論に触発されて、第1次革命の昂進を見ながら、「永続革命論争」(高橋馨)を展開することになる。この論争は、プレハーノフの「非連続的二段階革命論」の再検討を意味した。こうしたことからも、第1次革命で彼が担った理論的役割は大きいと言える。

そこで本稿の目的は、20歳代中頃のパルヴスが大飢饉をきっかけに著したロシアに関する現状分析的論稿を素材に、かかる「労働者民主主義論」の底流に迫ることにある。飢饉論を中心とした初期パルヴスのロシア認識を解明する作業を通してこそ、彼のロシア革命論はより立体的な像を結ぶのではなかろうか。

1. 大飢饉の原因をめぐって

実際にロシアの大飢饉は、どの程度の規模だったのか。統計によれば、ヨーロッパ・ロシアのうち特に被害のひどかった16県の総収穫高は、1890年には130百万チェトヴェルチ(1チェトヴェルチ=209.21リットル)近くだったのに対し、91年には7.8百万弱へと激減している。ヨーロッパ・ロシア50県全体を見ても、収量は過去10年間の最低を記録し、中でも農民の主食ライ麦の落ち込みが目立った[6]。

こうした大凶作の直接の原因は、1890年秋から91年夏まで続いた天候不順に帰せられるが、根本的な原因には、農奴解放の必然的帰結とも言える農民経営の疲弊が挙げられよう。周知のように1861年の農奴解放令によって、かなりの農民は解放前の耕地を領主の“切り取り”によって狭められた上、その分与地の所有権を得るためには高額の買い戻し金を支払わなければならなかった。しかも土地は農村共同体にまとめて譲渡され、買い戻し金の支払い等には共同体の連帯責任制がとられたのである。これらの点から、農民は糊口をしのぐのがやっとという状態に置かれていた。さらに当時の蔵相ヴィシネグラツキー(ヴィッテの前任者)による穀物輸出の奨励政策が、農民の貧困に追い打ちをかけた。彼は財政安定と金本位制の確立を目指して、農民の犠牲に基づく穀物の飢餓輸出を強行したのである。穀物はロシアの主要な輸出品目であった。「十分に食べてしまわずに輸出しよう」とのスローガンに、彼の考えは如実に示されている[7]。

以上の事態を受けて、ロシアのいわゆる批判的知識人たちは、飢饉論争を展開する。争点は、飢饉の原因たる農民経営の疲弊をめぐるものだった。ナロードニキはそれを、農業を犠牲にした資本主義的発展の危機的結果としたのに対し、マルクス主義者は、農業における資本主義化の遅れの帰結とみなしていた[8]。

若きパルヴスがSPDの機関紙誌にロシアの大飢饉に関する諸論文を発表してゆく背景は、かくの如しであった。彼は後年こう述懐している。「1892年に私は、飢饉に関する一連の論文を著した。そ

の中で私は、ロシアにおける産業と革命運動の急速な発展を予想した。」[9] 彼の飢饉論の基調はここにある。特に92年6月、『フォアヴェルツ』に4回連載の「ロシアの状態」は、彼の代表的な飢饉分析と目される。弱冠24歳で物されたこの論文は、「あきれるほどの造詣の深さ」によって読者の注目を惹いたという[10]。その冒頭、パルヴスは、ロシアの大凶作を天候不順に帰する見解を、「ありふれた、とりわけ西欧の観察者の見解」だとして退け、その背後にあるロシアの農業構造の大規模な変容の究明こそが必要だと説いている。そして、この究明に「ロシアの状態」の課題を置いた[11]。それでは、彼は飢饉の原因をいかに捉えていたのだろうか。

まずパルヴスは、その年（92年）の収穫予想から検討を始める。彼は前年の凶作がその年の作況に及ぼす影響を次のように説明する。最も目立つ影響は、播種用穀物の極端な不足である。それは冬穀、春穀とも同様であり、冬穀については前年秋の天候不順も伴って、収穫を断念してしまった耕地も少なくない。また春穀については耕地の半分も播種されないのが現状だ。その上、貴重な農業労働力であり、厩肥の供給源でもある役畜の激減は、農民に深刻な打撃を与えた。役馬なし農の増加が各地から報じられている。（当時のロシアでは役馬なし農は完全な農業経営喪失者を意味した[12]。）生き残っている役馬も生ける屍にすぎない。これでは施肥量の不足と農作業の停滞は必至だ。しかも当の農民は、「ロシアの半分は病床に変わっている」と見えるほど疲弊の極にある。とてもひとかどの仕事など期待できない。それゆえパルヴスはこう断ずる。「今年の収穫は、たとえ気象条件が望ましいものであるとしても……前年の収穫よりずっと悪い結果になるに相違ない」と[13]。

かかる考察を踏まえてパルヴスが強調するのは、飢饉が偶然ではなく、農奴解放後30年にわたって蓄積された弊害の必然的な産物だという点である。彼によれば、解放令によって農民に提供された分与地の狭隘さ、重税、昔ながらの耕作方法（三圃制）、耕地の細分化が「飢饉の土壌」として指摘できるという[14]。すなわち解放された農民は、狭い耕地と生産性の低い三圃制に拠って、買い戻し金、人頭税等の支払いを強制されてきたというのである。実際に、そのため当時の農民は常に飢餓の淵に瀕していた。そして彼らがこの悲惨な状態から抜け出すには、穀物の増産以外になかったのである。だが農業技術の向上はほとんど見られず、その方法は耕地の拡大という形をとった。かくて、休耕地、牧草地、森林は耕地に転用され（農民の分与地には耕地だけでなく、屋敷地、牧草地、場合によっては山林を含むこともあった[15]）、略奪式農耕が行われたのだった。土地の状態にかまわず収穫増が図られたのである。しかも、80年代の国際的な農業危機による穀物価格の下落が、農民の穀物増産に拍車をかけることとなった[16]。

パルヴスは、こうした農民の努力の否定的側面に着目していた。彼の見るところ、森林地帯の無謀な耕地化は、数百万ヘクタールに及ぶ森林を根こそぎにし、自然環境を破壊した。防風林は伐採され、熱波や砂塵が作物を直撃し、また河川は干上がり、土地の荒蕪化が進んでいる。ロシアの高官も、「ヨーロッパの穀倉であり、世界中で最も肥沃な地帯」は「不毛で惨めな荒野」に転じつつあると嘆いているのだ。ロシアはさらに、国際穀物市場において、アメリカと東インドに挟撃され劣勢に追い込まれている。結局農民は、穀価の下落を量で補うよう強いられ、これが耕地の拡大をさらに助

長した。ために休耕地はますます狭隘化し、土地は十分地力を養うことなく消耗していった。「そして崩壊が起こった」のである[17]。パルヴスは、農奴解放以来ロシアの農民が陥っている以上の悪循環こそ、大凶作の根本的原因とみなしていたのだ。

ところでパルヴスは、この時点ではまだ先の穀物の飢餓輸出が農民の貧困化に与えた作用については明言していない。ロシアの同時代人たちの多くは大飢饉を機に「ヴィシネグラツキー体制」に批判を強めてゆくが、飢饉の責任をヴィシネグラツキーの政策に帰するのは短絡的な見解であり、農奴解放の長期的帰結こそロシア農村の貧困の主因だとする研究もある[18]。とまれパルヴスが飢餓輸出の矛盾を論じるのは、1897-98年、再びロシアを襲った飢饉の実態を現地で検分したのちである。その際彼は、“飢えたるロシア”の現実を「ロシア農民の慢性的な飢餓は、ロシアの穀物輸出の対応物である」と結論している[19]。

いずれにせよ、飢饉は近代ロシア社会が孕む矛盾の集約的表現だった。いったいパルヴスは、この飢餓が慢性化するロシア社会の行く末をどのように占っていたのか。

2. 飢饉とロシア社会

(1) 農民層の分解について

大飢饉の最大の被害者は、言うまでもなく人口の圧倒的多数を占める農民であった。従ってロシア社会の今後を予見するためには、農民層の現状をまず把握しなければならない。パルヴスは、彼らの苛斂誅求による惨状の指摘を経て、ツァーリズム論へと至るのである。

彼はこう訴える。税の苛酷さは、常に滞納金が生じていることからも容易にうなずける。しかも、たとえ豊作であってもそれはこの滞納金によって相殺されてしまうのだ。「それゆえ長らく農民にとって収穫の良し悪しなどは、本当はどうでもよかった。」また、納税のため、穀物を秋に捨て値で売り、播種のため春に倍の値で買い戻す“秋売春買”も頻繁に行われている。さらに「気違いじみた」ロシアの税制は、耕地の狭い農民ほど税を高負担する仕組みになっている。すなわち、農民を所有耕地面積に応じて5段階に分類すれば、最上位のグループの1ディシャチーナ（1.092ヘクタール）あたりの税額は99コペイカであるのに対し、最下位グループのそれは、実に6ルーブリ82コペイカにものぼる勘定になる[20]。

なるほど以上のパルヴスの指摘は、ロシア農村に典型的な矛盾をほぼ的確に捉えていたと言える。例えば、租税は秋に徴収され、農民は穀物を季節的安値にあるときに供出せざるをえず、春の端境期には穀物はほとんど残っていなかった。それゆえ地域によっては、全体の8割に及ぶ農民が“春買”を余儀なくされたのである。特に中農・貧農の中には穀物購入のために借金を重ね、“債務奴隷状態”に陥ってゆく者も多かった[21]。また、「少い分与地を受取れば受取るほど、オブロク〔貢租〕額が相対的に高くなる」“逓減制（グラダーツィア）”と呼ばれる税制は、農奴解放のきわめて異常な特徴とみなされるところである[22]。

農民に対するこのような苛酷な租税収奪の結果は、パルヴスには次のように映った。「そのような

条件下では、小農は零落するに相違なく、土地や役畜は富農や高利貸しの手に渡ってしまうのだ。……今や何が起こるのだろうか。起こるのは—農民ロシアの崩壊である。このことはすでに事実から明らかになっている。個々の農民の間に、利益を収めるためだけに、そしてできるだけ均等に割替えられた、農村共同体の所有する土地—これが今までロシア農業の基本原則であった。こうした牧歌的な状態は今や崩壊している。農村共同体は解体されているのである。」すなわちパルヴスによれば、借金で首が回らぬ農民の借地農化、分与地の放棄、そしてその富農への集中は、農村共同体を有名無実化しているという[23]。彼は、大飢饉という先鋭的な形をとって現れたロシア農業の構造的矛盾は、農民層の分解＝農村共同体の解体をもたらすと断じたのだ。

ここに示されたパルヴスの共同体解体論は、解体の契機を「租税の重圧」という外側からの圧迫に求めるという点で「外的解体論」[24]と位置づけられよう。すなわちこの論理だけでは、外側からの圧迫さえ除去すれば、共同体は回復できるというナロードニキの見解とさして変わらなくなる恐れなしとしない。例えば、『ロシアにおける労働者階級の状態』(1869年)の著者フレロフスキーは、ロシアの農村共同体を最良の農業形態だとし、買い戻し金支払い等の外的障害が除去されるならば、ロシア農業の生産力は急速に増大し、農村共同体の経済的有利性が明瞭になると考えた[25]。そこでパルヴスの次の言葉は、ナロードニキの共同体擁護論に対する反論にもなろう。「60年代の解放政策によって、ロシアは商品生産国となり、単純商品生産から複雑な資本主義的生産への移行が起こりつつある。」[26]

説明を補足して言うならば、パルヴスは、ロシアでは1861年の農奴解放令の公布を境に、共同体の土台である現物経済は商品経済に取って代わられ、今や資本主義経済へと移りつつある以上、共同体への回帰は不可能だと認識していたのである。というのも商品経済は、土地の共同所有を基盤とする共同体的原理とは相容れない。従って上述のナロードニキの見解は、その立論の根拠を失ってしまうことになる。そして、一旦資本主義に足を踏み入れたからには、直接的生産者たる農民層はブルジョアジーとプロレタリアートとに両極分解してゆくとするのが、当時のヨーロッパのマルクス主義者に共通した理解であった。それは後進国ロシアでも例外ではない。パルヴスもこの前提に立っていた。ゆえに彼は、大飢饉が必然的な小農没落＝共同体の解体過程を急速に促進するという側面を重視していたのである。

それでは、慢性的な農民経営の逼迫はいかにして解決すればよいのか。パルヴスは、「農民を困窮から解放するためには、農耕の社会的諸条件が変えられなければならない」[27]と主張するが、彼の以上の論理構成からすれば、その方途は自ずと明らかだった。

(2) 資本主義発展に関する洞察

前に述べたように、パルヴスはドイツにあって、90年代初頭のロシアは商品経済から資本主義経済への移行過程にあるとみていた。ロシア農業の再生もこの視点に立って考えられたのである。端的に言えば、それはロシア農業の資本主義化であった。彼は、農業の生産性を高めるには、資本力を要する農法への転換が図られるべきだと力説する。すなわち、具体的には、三圃制を輪作に変え、厩肥で

はなく別種の肥料を施し、かんがいを整え、役畜に代えて農業機具を導入せよと提案するのである。「それには資本がいる。」こうなるとますます農民にとって、大土地所有者との競合は苦しくなる。「それゆえ遠からず小農身分の最後の環も一掃されるに相違ない。」[28)]

換言すれば、パルヴスの見解においては、飢饉によってその進行の度が速まる小農没落は、飢饉を克服しようとする生産性向上の努力によって、さらに加速されるのであった。従って、農民大衆の土地放棄とプロレタリア化は必至であるとされた。かくして零落した農民に残された選択は、地主、富農に労働力を販売する土地プロレタリアートになるか、それとも都市へ流出して都市プロレタリアートになるしかない。いずれにせよ彼らは安価な働き手になるであろう。こうした予測を総括してパルヴスは、以下の如く述べている。「農民の土地は資本家の所有になり、農民自身は資本家の賃労働者になる。小農経営に取って代わるのは資本家的大規模経営である。」[29)]そして彼は、農民層の分解とロシアの資本主義発展との間に密接な関連があることを見出す。

その際注目されたのは、小農没落によって創出される廉価な労働力であった。パルヴスによれば、ロシア産業は近年、保護関税の庇護下（1891年7月1日には、77年以来の関税引き上げの総仕上げとして、新高率保護関税が施行された[30)]）で成長を遂げ、今では西欧に比肩するほどになっている。しかもロシアには豊富な鉱物資源があり、またその広大な版図は、地続きの植民地としての、及び商品の販路としての役割を果たしている。その一方で、産業発展の主たる妨げとなっているものこそ、労働力不足なのだ。「これらのことを考慮すれば、農民大衆のプロレタリア化がロシア産業界にいかに大きなはずみをつけるかは、ますます明らかになろう。」[31)]

このように、パルヴスは廉価な労働力創出にロシア産業発展のてこの役割を認めた。さらに彼は、今後15年という年限をきってまで、ロシアは資本主義的に“繁栄した”国になると言いきるのである。「数十万の人口を擁する大工業都市、鉱山地域での精錬所、炭坑、国中にはりめぐらされた鉄道網、国内及びアジアでの莫大な商品流通、そして開墾・耕作・播種とも申し分ない土地、外国への一層の穀物輸出、巨額の富、低廉なる利子、—都市部における賃労働者大衆と農村部における賃労働者大衆—これがおそらく15年後のロシアの姿だろう。」[32)]つまり彼は、資本主義の発展によって、ロシアにおいて近い将来農工両全が実現できると展望したのであった。

以上の論旨から判断すると、パルヴスはきわめて楽観的な資本主義発展論を打ち出していることがわかる。彼は一国的視点で現物経済→商品経済→資本主義経済という系列を前提に、その過程で生じる農村共同体の必然的な解体、しかも大飢饉による急速な解体に、ロシア資本主義発展の内的起動力を看取していたのである。確かに1890年以降、ロシアの資本主義はめざましい発展を遂げるのであり、その意味で彼は、時代の趨勢を敏感に感じ取っていたとも言えよう。その楽観的な見解は、80年代半ばにプレハーノフが、ロシアは「長期かつ困難な資本主義の道」[33)]を辿るとしたのとは対照的である。80年代は「緩慢な発展」の時代であった。ナロードニキがその時期、「ロシア資本主義没落論」を提起した背景もそこにあったのである。だが90年代にはもはやその余地はなく、ロシアのマルクス主義者たちは種々の資本主義発展論を唱えてゆく。

その中にパルヴスの所論を置いてみると、それがレーニンの「市場理論」と同じ視角に立っていることに気づく。周知のようにレーニンは、処女論文『農民生活における新しい経済的動向』(1893年)から大著『ロシアにおける資本主義の発展』(1899年)に至る「初期の農業理論」と呼ばれる諸論稿において、農民層の両極分解とそれに伴う資本主義的国内市場の形成を主張し、そこからロシア一国内部における資本主義の自生的発展を説いたのである[34]。なるほどパルヴスは、レーニンほど緻密な理論を展開しているわけではないが、立論の出発点はほぼ同じとみなされよう。ゆえに彼はレーニンと同様の限界を有していた。

すなわちパルヴスも、後進国ロシアの資本主義発展の特殊性を等閑視していたのだ。実際にはロシアの資本主義は、先発資本主義国イギリスの場合とは異なり、農民層をくっきりと二極分解させるほどの力は持っていなかったのである。なぜなら、ロシアに限らず後発資本主義国の工業は、先進的な技術体系の移植によって、高い資本の有機的構成の下で展開せざるをえず、労働力需要は小さくてすむ。ゆえに工業が農村から都市へ吸引する労働力は微弱なものとなるからである。その結果農民は農村に滞留し、そこで生計を営まなければならない。苛酷な雇役制はここに由来していた[35]。だがパルヴスは、既述の農民の搾取状況に対する深い認識にも拘らず、農民層の必然的解体という見地を崩さない。むしろ飢饉によるその急速な分解を、革命的プロレタリアートの増大という革命戦略上の視点で把握しようとしたのだろう。その理論的淵源は、エンゲルスの『フランスとドイツにおける農民問題』に遡る[36]。しかしパルヴスの農民に対する否定的評価は、1905年革命において農民が発揮した革命的エネルギーの前に、訂正を余儀なくされることになるのである[37]。

(3) ツァーリズム論

さて、農民の零落から資本主義の発展というロシアの未来像を導き出したパルヴスにとって次なる課題は、それがツァーリ体制と果たして両立しえるのかというものだった。彼は社会経済的分析ののち、政治的分析へと論を進めるのである。まず、ツァーリ体制の財政状態が検討対象となった。

パルヴスの議論に入る前に、その前提として、“大衆収奪の税制”と言われる当時のロシアの歳入構造に、簡単に触れておくことにする。それは、間接税偏重の構造をなしていた。すなわち、例えば1892年の費目の百分比では、直接税は9.4％にすぎないのに対し、間接税は実に49.0％にも及んでいた。しかもそのうち飲酒税は、全体の27.7％をも占めていたのである。ロシアの税制が「よっぱらい財政」と呼ばれる所以である。さらに農民の「買い戻し」支払いが7.9％であった[38]。(解放令の規定により、農民は国家の肩替り支払いで分与地を買い戻し、一挙に対地主関係を断ちきることができた。だがこれにより農民は国家の債務者となり、立替え支払いの額を49年間にわたって政府に対して年賦償還しなければならなかったのである[39]。)こうしたことから、農民はツァーリズム財政の主要な担税者だったことがわかる。以上の点を踏まえてパルヴスの所説に戻ろう。

それによれば、ツァーリ体制にとって主たる税収源をなす農民の零落は、そのまま財政難を意味することになる。それは、農民が重税と凶作によって滞納金を累積させていることからも明らかであ

る。だがそれ以上に体制に痛手を与えたのは、飲酒税収入の激減であろう。というのも、酒類の主要な消費者でもある農民が飢饉によって窮乏化した結果、「飲酒税は必ずやごくわずかな収益しかもたらさなくなる」からである[40]。パルヴスの見るところ、農民の担税能力はすでに涸渇していた。

しかしその一方で、国債等の利払いや軍隊の維持費等の「支出は減らすことはできない」のも事実である。パルヴスの指摘にもあるように、同じ92年に歳出に占めるこれら両費目の割合は、経常合計の6割程度にも達していた[41]。かくて財政再建が最大の懸案となったのである。彼は以下のように語っている。借款は所詮、急場しのぎにすぎない。結局、「政府は社会の経済力を担っている階級に頼らねばならないのだ。」つまり、これまで農民層に頼ってきたツァーリズムは、経済力をますますその手中に収めつつある資本家階級を頼りとすることになろう。従って、ツァーリ政府のとる政策は、「資本の目標に応じたものにならざるをえないのである。」資本の利害が全てに優先され、絶対主義は資本主義の下僕になる。そこにツァーリズムの唯一の活路があるのだ、と[42]。これが、ツァーリ政府の財政状態の検討から導き出された回答だった。

またパルヴスは、絶対主義体制を支える両輪たる常備軍と絶対主義官僚についても、分析を加えている。彼の観察するところ、ロシアにおいては双方とも弛緩しきっていた。すなわち、軍律の厳しいことで知られる陸軍にも、すでに待遇、食事等で不満がうっ積してきており、特に下級将校は蜂起となれば、民衆の側につくだろう。兵士の忠誠心も揺らいでいる。そのため蜂起に際して政府は、その地に軍隊を差し向けることが困難になろう[43]。また官吏層についても同様である。彼らの最大の関心事は、俸給が滞りなく支払われるかどうかにあった。ゆえに「もし官吏層が革命化し始めるのなら、それは彼らが猟犬の鼻で正規の給与の支払いがもはや期待できないことをかぎつけている何よりの証である。ロシアの絶対主義の屍は、すでに官吏層にそれと気づくほどの悪臭を放っているのだ。」[44]

資本への従属、軍・官僚の離反、そしてすでに述べたように、収穫以上の税を課せられた農民のいつ爆発するとも限らぬ不満、かかる事態を踏まえてパルヴスはこう断言する。「絶対主義はもはやその命脈が尽きている。ロシアは憲法を獲得するのだ。」彼は帝政から立憲体制への移行を予想したのだ。だが問題はその内実にあった。ここでパルヴスは、立憲制の担い手となるべきロシアのブルジョアジーの限界を指摘する。彼らは民主的憲法（＝民主体制）を望まないであろうというのである。つまり民主的憲法の基本をなす普通選挙権、出版・言論・集会の自由の実現など、彼らの望むところではない。そんなことになれば、政治権力は人民大衆の手に移りかねないからだ。それゆえ「ブルジョアジーが必要とする程度の自由は、ロシア帝国にも存在する。すなわち価格表や宣伝パンフを印刷し普及する自由、株式会社を設立し、また株主総会で思う存分に議論する自由などである。」[45]

このようにパルヴスは、すでにこの時点で、ロシア・ブルジョアジーの政治的反動性を察知していた。では、民主的憲法と真の自由を実現するのは、いかなる勢力なのだろうか。

3. 革命像の模索

(1) プロレタリアートのヘゲモニー

確かに、民主的憲法と政治的自由の獲得は、その頃のロシアの革命運動の共通の目標となっていた。80年代後半、「人民の意志」党のテロリズムが鎮静化し、その一方でロシア・マルクス主義が勃興期を迎えるや、「政治的自由の確立」という当面の課題が、革命諸党派結合の接点として注目される観があったのである。そして当時の大勢は、その実現のために革命家とリベラルとの共闘を目指していた。プレハーノフも、90年の段階ではまだリベラル不信が強かったが、92年にはリベラルの飢饉救済活動に共鳴、彼らに社会主義者との連帯を呼びかけるようになる[46]。1893年夏にサラトフで結成された「人民の権利」党は、こうした動きの典型例だろう。同党は「政治的自由」の獲得のため古参社会主義者とブルジョアジーの進歩勢力の結集を唱えていた[47]。

以上のようなロシアでの動きからすれば、この点についてのパルヴスの主張はきわめて特徴的と言える。すなわち彼は、民主的憲法と自由を真剣に求めるのは労働者階級だけだと断言するのである。「この階級は、自らを組織しうるために、資本の力に対抗するために、自由を獲得しなければならない。そしてこの階級は、民主的憲法を獲得しなければならない。なぜならこうしてのみ、彼らは政治的優位を保つからである。」パルヴスによれば、帝政はその経済的基盤をなす農民層の没落によって、国の経済力を握る資本家層に譲歩することだろう。資本家層に憲法が「与えられる。」しかし、やがてこれに満足しない労働者階級が、憲法の民主化を目指して起ち上がる。「彼らは支配的な資本主義との厳しい闘争に持ちこたえねばならないだろう。しかし勝利は彼らのものに相違ない！」[48]

パルヴスのかかる自信は、いかなる論拠に由来するものなのだろうか。80年代に「爆発的」に増加したとはいえ、依然として極少数のロシアの労働者階級に、そこまでの成長を期待できるのか。もちろん彼は、当時のロシアの労働者の悲惨な状態を認識していた。例えば農村からの出稼ぎ労働者が大半を占める炭鉱労働者の低賃金労働の実態を剔出し[49]、またシベリア鉄道建設に従事する労働者の劣悪な労働環境については、その無制限の搾取ぶりをこう告発している。「飢えで衰弱したロシア農民は、プロレタリア大衆を形成し、ロシア資本主義は彼らを使って“本源的蓄積”の術の稽古を行なっているのだ。」[50]

こうした搾取の横行は、労働運動の未成熟の帰結であった。しかし、先進的なヨーロッパ・ロシアの西部諸県等では、その成長の徴候が散見できた。パルヴスはそこに、ロシアの労働運動の発展の可能性を託したのである。特に彼が期待をこめて語るのは、その意識の高さである。当地で開かれた1892年のメーデー集会での労働者の演説は、それを象徴するものだった。彼はその内容を詳細に紹介する。

すなわちその演説はまず、5月1日の意義、社会における階級対立の非和解性、資本主義衰滅の必然性を明らかにした。弁士は次いで、資本主義の下で苦しむ労働者階級が自らを解放するためには、組織が不可欠であることを強調し、その歴史的な模範である西欧の兄弟の運動・教訓に学ぶよう訴え

た。またそこでは、ユダヤ人問題、婦人問題は階級闘争に還元されるべきこと、憲法の獲得が労働者階級の闘争の第一歩となることが説かれ、さらにツァーリ体制との闘争に生涯を捧げた先駆者たちへの称賛がなされたのだった[51]。

労働者階級の成長をこのように説くその日の演説を受けて、パルヴスは次の結論に到達する。「強力な革命勢力がロシアに台頭している。すなわち労働者階級である。……ロシアの臆病なブルジョアジーは、きっと政府との妥協を模索することだろう。……階級意識を備えた労働者は妥協することなどできない。民主的憲法は、彼らにとって死活問題なのだ。そしてロシアの労働者は、絶対主義を打倒するであろう—労働者自身と全人類のために。」[52]

要するにパルヴスは、ロシアで民主的憲法と政治的自由を実現できるのはプロレタリアート以外にないことを再度強調しているのである。言い換えれば、ここにあるのは、プロレタリア主体のブルジョア革命の構想だと解釈できよう。その成否は、プロレタリアートの階級意識の成熟にかかっていた。すなわち彼は、1880年代半ばにようやく成立し、まだ超搾取の状況を引きずっているロシアの資本主義の後進性に比べて、ロシアのプロレタリアートの階級意識が不均等に発展している点に、プロレタリアートのヘゲモニーを主張する論拠を見出しているのだ。この認識は、革命の国際的連続性の見解と不可分だった[53]。

(2) 国際革命への期待

もとより、当面の課題をプロレタリア主体のブルジョア革命とする見方は、パルヴスに限ったものではなく、プレハーノフやレーニンにも共通する思想であった。だが質量ともに脆弱なロシアのプロレタリアートだけでは、ツァーリズムを打倒することはできない。そこで問題となるのが、友軍についてである。プレハーノフはリベラル・ブルジョアジーに、のちのレーニンは農民に友軍を求めた。特に当時ロシアのマルクス主義者の間で支配的だったプレハーノフの見解は、「歴史の法則」を強調し、プロレタリアートには、ブルジョアジーを権力の座につかせるよう、革命的にして自制的に行動することを期待していた[54]。それゆえそれは、現実との全面的な対決の思想にはなりえていなかったと指摘される[55]。

しかしパルヴスは、西欧のプロレタリアートに友軍を求めることによって、現実の諸条件の中から革命への展望を切り拓いてゆく。その突破口は、ロシアの大凶作に起因する西欧における階級闘争の激化にあった。つまり、ヨーロッパの穀倉の地位を占めてきたロシアは、1891-92年の大凶作により、穀物輸入国に転落しかねない状況に追い込まれていた。穀倉ロシアの破綻は、それまでロシアからの輸入に頼ってきたヨーロッパに何をもたらすのか。パルヴスはかかる視点から、ロシアの隣国ドイツの労働運動の将来を見据えるのだ。

「ドイツは穀物輸入なしにはやってゆけない」とのパルヴスの言葉にあるように、その頃のドイツは相当量の穀物を輸入に頼っていた。むろんロシアへの依存度は高く、小麦、ライ麦に至っては85年の数値で実に5割強をロシアからの輸入で賄うほどだった[56]。凶作によるロシアの穀物の途絶は、ド

イツにとって大打撃だったことは言うまでもない。パルヴスはこの点に注目している。それによれば、穀物の不足分は他国からの輸入で補えるものではない。「そのような状況下では、今後数年の間に大幅なパンの値上がりは必至である。」このことは、労働者と資本家の間で賃上げをめぐる闘争を昂進させるに違いないだろう。というのも、穀価の上昇は生活費の上昇に直結するゆえに、労働者は当然賃上げを要求することになる。一方、資本家にしてみれば、労賃引き上げは商品価格の上昇にはねかえるために、それを拒まざるをえない。ヨーロッパの工業諸国が商品販路を求めて互いにせり合っている世界市場の現状では、なおさらである。しかも、大量の産業予備軍の存在がこの闘争を資本家の方に有利にさせている[57]。

従って「労働者階級は厳しい闘争を目前に控えている。そしてどこでも、労働者の力は組織にのみ存する。ただし、労働組合的組織においてのみならず、結合された政治的労働組合的組織においてもだ。……労働者階級が団結すれば、たとえ何が起ころうとも、労働者階級にまさる力は社会に存在しないのだ。」[58]

つまり労働者の組織力は、労働組合と労働者党（「政治的労働組合的組織」は、労働者党を指すとみなされる）が保障するとされたのである。パルヴスの説明では、前者は資本家個々に対する経済闘争を担い、後者は、個別の経済闘争では表出しきれない労働者階級全体の利益を、資本家階級に対置する政治的機能を備えるという[59]。そして両者の有機的結合こそ、労働者階級が「厳しい闘争」を乗りきる機軸であった。ここでとりわけ重要なのは、彼が組織労働者に寄せる絶大なる信頼である。それは、「革命的労働者に対するほとんどロマンチックな信念」と評される[60]ほどであり、この「信念」は、その後の彼の理論活動を大きく規定する動かぬ座標となってゆく。

例えばパルヴスは、のちに、ドイツの革命運動の停滞の原因を、プロレタリアートに帰するのではなく、彼らの本来持つ力を革命へと転化できずに日常活動に埋没する党に帰そうとした[61]。また、「血の日曜日」の敗北については、労働者大衆が示した革命的エネルギーに対して党組織が不十分であったことの結果だと総括して「革命を組織せよ」と述べた[62]。そして、この組織労働者の神聖視とも言うべき「信念」は、彼の革命像にあっては、その国際的連関の媒介項の役割を果たすのである。かかる意識を前提としてこそ、後発資本主義国ロシアの労働者階級の台頭と、ロシアの大凶作に端を発したドイツにおける階級闘争の激化は、国際革命という同一の視点で把握できよう。パルヴスは、革命の国際的連続性について次のように考えていた。

「ロシアの労働者階級は、全世界の団結したプロレタリアートの大きく強力な鎖の新たな環としてのみ現れるのであり、この鎖を断ち切ることのできるような力は地上には存在しない。そしておそらくロシアの資本主義が頂点に達すると同じ瞬間に、国際的な資本の力とロシアの資本主義の力は、すでに掘り崩されていることだろう。」[63]

先のプレハーノフも、確かに革命の国際的関連を期待してはいたが、それを必然とはせず、基本的にはロシア一国を前提として「非連続的二段階革命論」を提起した[64]。しかしパルヴスの構想では、この関連は必須であった。彼のプロレタリア主導の革命の現実性は、国際革命の連鎖の中に認められ

たのである。そこには、ロシア及び西欧のプロレタリアートの階級意識に対する確たる信頼が伏在していた。

(3) 革命諸派の交錯の中で

既述の如く、パルヴスは90年代初頭の一連のロシア関連論文において、大飢饉によるロシア社会の動揺とそこから引き出される革命の展望を、ドイツの同志たちの前に明らかにしたのである。しかも彼が示した革命構想は、国際革命を志向していた点で、ドイツの同志たちにとっても無関係ではなかった。だが、当のドイツの社会主義者たちは、それほどロシアの情勢に注目してはいなかったと言ってよい。まだその頃の彼らは、ロシアの革命運動はヨーロッパで最も遅れたものとみなしており、それゆえロシアはドイツの政治闘争の周縁的存在にすぎなかった[65]。

一方、当時のロシアの革命運動の現実も、パルヴスの構想を実現するにはほど遠かった。すなわち、その指導的中心とも言うべき亡命ロシア人革命家たちは、すでに崩壊した「人民の意志」党の流れを汲むラヴロフ派と、プレハーノフが率い、マルクス主義の立場をとる新興勢力「労働解放」団が、主導権を競っていたのである。「人民の意志」派は「労働解放」団を「分裂主義者」だとして批判し、「労働解放」団は、「人民の意志」党のかつての領袖チホミーロフの転向（1888年8月）をもって、自らの正当性の根拠とした。SPD はこの争いに微妙な対応をする。

すでに晩年を迎えていたエンゲルスは、こうした両派の対立を憂慮し、来たるべきロシア革命に備えて、ロシアの革命家による統一戦線結成を切望していた。91-92年の飢饉は、彼に革命の間近なることを予感させただけに、この願いは一層であった。ベーベルがその調停工作にあたったことからもわかるように、SPD 幹部もエンゲルスと同じ願いを有していたのである[66]。それは彼らの両派に対する中立的態度にも現れている。その例として、カウツキー編集の理論誌『ノイエ・ツァイト』にはプレハーノフ派の論稿が掲載されていたのに対し、W. リープクネヒト編集の中央機関紙『フォアヴェルツ』は、ラヴロフ派の寄稿に門戸を開いていたことが挙げられよう[67]。

SPD のかかる態度の背景には、ロシア帝国の解体を目指す運動であれば、それは党派を問わず無条件に支持すべきだという意識があった。西欧の社会主義者はツァーリズムを、マルクスと同様に「全ヨーロッパの反動の堡塁」だとみなしていたのである。もちろんパルヴスも、このツァーリズム観には同意しよう。そして彼はまたスイス留学時代、チューリヒで両派の結合を目的に設立された「社会主義文献フォンド」（1887-1888年）に参加し、両派の反目をロシアの革命運動の障害とする立場に与した[68]。しかし90年代に入ると、彼はロシアの情勢分析からその立場を改め、SPD の中立的態度を退けるのである。彼から見れば、SPD が、チホミーロフ転向以来退潮著しい「人民の意志」派に寄せる期待は、現実を知らぬ無益な期待と映った。

パルヴスは、ロシアにおける労働運動の成長を指摘することによって、「人民の意志」派を批判し、SPD 幹部に態度の変更を促すのである。それによれば、「全く聞き覚えのない報道がロシアからもたらされている。」というのも、これまでロシアに関する報道は、帝政の残虐行為、人民の悲惨な状態、

それに憤りを感じた人々の勇猛果敢な行為等々と相場が決まっていた。だが今や、労働者大衆の覚醒が伝えられるのである。それは、「全世界にとって教訓的な事例」に値する。しかし、「人民の意志」派の従来の見解では、この現実は捉えきれない。すなわち彼らは、「所与の政治的条件の下ではロシアの労働運動は不可能であり、それゆえ人民のために政治的権利を闘い取ることは、……インテリゲンツィアの課題だ」と主張してきたのである[69]。

そして、こうした「人民の意志」派の主張を、パルヴスは「人民のためと称していながら、そこには人民が不在なのだ。人民こそがその全てを作る歴史において、あたかも人民不在のままで何かが作られうるかのようだ」と評した[70]。それは、プレハーノフが「人民の意志」派の革命論を、「人民不在」の革命論だと批判した[71]ことに似ている。パルヴスにしてみれば、彼が全幅の信頼を置く労働者階級がロシアで成長しつつある以上、その役割をインテリゲンツィアが代行するという見解は承服できなかったのだろう。彼は、今後は「労働解放」団と労働者階級が、ロシアの革命運動の主流となることを力説している。

「彼ら〔「労働解放」団〕が予見したことが起こっている。インテリゲンツィアはロシアで自由を勝ち取れなかった。今や労働者が台頭している。あらゆる弾圧策にもかかわらず、労働者は台頭し、結集しているのだ。」[72]

ロシアとドイツの革命諸派が交錯する中、パルヴスは上述のように自らの立場を鮮明にし、SPD、とりわけ「労働解放」団の存在や活躍を軽視し、「人民の意志」派に紙面を提供していた『フォアヴェルツ』編集部に、「労働解放」団がロシアの革命運動の中心勢力になりつつあることを強く印象づけたのである。彼のこの強力な推薦もあって、SPD 幹部は「労働解放」団こそロシアの代表だと認めるようになる。『フォアヴェルツ』にもラヴロフらの寄稿は掲載されなくなり、92年12月にはついに、W. リープクネヒト宛てのプレハーノフの公開書簡が紙面を飾るに至る。パルヴスは、社会民主主義の勢力伸張とナロードニキ主義の衰勢というロシアの現実に SPD の目を開かせたという点で、「ロシアとドイツの社会主義者の関係に対して初めての貢献をなした」のだった[73]。

むすびにかえて

以上、1892年6月に発表された「ロシアの状態」とそれを補足する諸論文を中心に、パルヴスの飢饉論の再構成を試みてきた。それを今一度要約すれば、パルヴスはロシアの大飢饉の根本原因を農業の資本主義化の遅れに帰し、従ってその最終的解決策は農業の資本家的生産方法への移行以外にないと断じた。そしてこの移行は、大飢饉によって促進される農民層の分解を一層加速させ、大量のプロレタリアートを創出するだろうとの予測を示す。そこから彼は、ロシアの資本主義の急速な発展を断定的に論じたのである。創出される豊富な労働力こそ、その裏づけであった。

このようにパルヴスは、ロシア資本主義の発展を一国内部の自生的発展として把握するのであるが、革命の現実性については国際的視野で考えていた。その背後には、ロシアのブルジョアジーに対する不信感とロシア及び西欧のプロレタリアートに対する期待感が表裏一体をなしていたのである。

彼の革命論は、少数だが階級意識の高いロシアのプロレタリアートがそのブルジョア革命を担い、西欧のプロレタリアートがこれを支援するという構図だった。パルヴスのプロレタリアートに対する絶大なる信頼が、かかる展望を可能にした。彼がSPD幹部に「労働解放」団を強く推したことも、この観点から理解できよう。

すなわち、青年期のパルヴスの議論には、早くも「労働者民主主義論」の基本的発想が荒削りな形にせよ胚胎していたのである。それはマルクスが『1850年3月の中央委員会の同盟員への呼びかけ』でドイツを対象に提起したプロレタリア主導下の連続革命の構想[74]のロシア版とも呼ぶべきものだろう。そして彼の示唆するロシア革命の現実性は、90年代後半、彼が没頭する世界市場に関する研究によって、世界資本主義の情勢認識、特にその恐慌循環という側面から補強されることになる[75]。

とはいえその一方で、この時期のパルヴスの主張には、諸々の理論的未熟さも指摘できる。例えば、農民層の分解をめぐる誤認はすでに触れたとおりであるが、彼の労働者階級に寄せる無制限とも思える理想化も、批判を免れない。とりわけ彼がロシアのプロレタリアートの階級意識の昂揚として捉えたものは、実際には被抑圧民衆のより原初的な抵抗の噴出ではなかったのか。また、永続革命の視点から見れば、彼は革命の国際的連続性については言及しているが、その段階的連続性の位置づけは不明瞭なままである。それが明確化されるには、1905年を待たなければならない。

ほかにも批判点は多々あろう。だが忘れてはならないのは、パルヴスがすでに20歳代中頃に、プロレタリアートの権力獲得を常に現実的な課題として認識していたことである。終生変わらぬ彼の革命に対する基本姿勢がここにうかがわれる。彼にとって革命とは、座して待つものではなく、闘い取るものだった。

注

1) Leopold H. Haimson, *The Russian Marxists and the Origins of Bolshevism* (Harvard UP, 1955), pp. 49–51.
2) マルトフ、加藤一郎訳『ロシア社会民主党史』(新泉社、1976年) 16頁。
3) パルヴスの生涯については、シャルラウ、ゼーマン、蔵田、門倉訳『革命の商人』(風媒社、1971年) を参照されたい。なお彼がパルヴスなる筆名を用いるのは、1894年以降であるが、本稿ではパルヴスで呼称を統一する。
4) Winfried B. Scharlau, *Parvus-Helphand als Theoretiker in der deutschen Sozialdemokratie und seine Rolle in der ersten russischen Revolution (1867–1911)*, Phil. Diss., Münster (1960), S. 37.
5) 拙稿「第1次ロシア革命におけるパルヴス、トロツキー、レーニン」『明治大学大学院紀要』第24集-3 (1986年)。
6) Richard G. Robbins Jr., *Famine in Russia 1891·1892* (Columbia UP, 1975), p. 2, 185.
7) *Ibid.*, pp. 1–6.
8) 詳しくは、田中真晴『ロシア経済思想史の研究』(ミネルヴァ書房、1967年) 第7章。
9) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S. 8.
10) Konrad Haenisch, *Parvus Ein Blatt der Erinnerung* (Berlin, 1925), S. 8.
11) [Parvus], "Die Lage in Rußland I. Die nächste Ernte", *Vorwärts*, den 17. Juni 1892.
12) 日南田静真『ロシア農政史研究』(御茶の水書房、1966年) 208頁。
13) [Parvus], a. a. O.

14) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands", *Vorwärts*, den 18. Juni 1892.
15) 菊地昌典『ロシア農奴解放の研究』(御茶の水書房、1964年) 419頁。
16) Robbins, *op. cit.*, p. 6, 9.
17) [Parvus], a. a. O.
18) Robbins, *op. cit.*, p. 8.
19) C. Lehmann und Parvus, *Das hungernde Rußland* (Stuttgart, 1900), S. 535.
20) [Parvus], a. a. O.
21) ラウエ、菅原崇光訳『セルゲイ・ウィッテとロシアの工業化』(勁草書房、1977年) 25頁、日南田、前掲書、204、208頁。
22) 菊地、前掲書、421頁。
23) [Parvus], a. a. O.
24) 小島定氏によれば、プレハーノフは『われわれの意見の相違』(1885年) において、ロシア農村共同体の解体の必然性を「外的解体論」と「内的解体論」(土地の共同所有と経営の私的所有との内在的矛盾の把握) という二重の論理をもって説明した。しかし大飢饉に際して書かれた「全ロシア的破産」(1892年) では、飢饉の原因究明を通じて解体の契機を「租税の重圧」に求める「外的解体論」が前面に登場し、「内的解体論」は後景に追いやられている。小島定「プレハーノフの飢饉論(一)」『商学論集』(福島大学) 55巻1号(1986年) 134頁、同「プレハーノフの飢饉論(二)」55巻2号、81頁。なおパルヴスは、このプレハーノフの「全ロシア的破産」を絶賛している。[Parvus], "Die Hungersnot in Rußland", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 2, S. 486.
25) ヴァリツキ、日南田他訳『ロシア資本主義論争』(ミネルヴァ書房、1975年) 154頁。
26) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".
27) [Parvus], "Die Hungersnot in Rußland", S. 494.
28) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".
29) Ebenda.
30) 和田春樹「近代ロシアの発展構造(一)」『社会科学研究』17巻2号 (1965年) 160頁。
31) [Parvus], a. a. O.
32) Ebenda.
33) 高橋馨「初期プレハーノフの諸問題」『現代思想』(青土社) 1976年11月号、230頁。
34) 詳しくは、渡辺寛『レーニンの農業理論』(御茶の水書房、1963年) 95-136頁。
35) 前掲書、99頁。中山弘正『帝政ロシアと外国資本』(岩波書店、1988年) 33、53頁。
36) この点については、田中良明「パルヴスとカウツキーの農民論」『法経論集　経済・経営篇Ⅰ』(愛知大学) 111号 (1986年)。
37) 彼は『プロレタリアートの階級闘争』(1911年) において、それまでの低い農民評価を改め、農民大衆とプロレタリアートの利害のつながりが、社会主義を準備すると述べるに至る。拙稿「パルヴスの社会主義像」『明治大学大学院紀要』第25集-3 (1987年) 129頁。
38) 中山、前掲書、80-81頁。
39) 菊地、前掲書、426頁。
40) [Parvus], "Die Lage in Rußland III. Das Zarentum", *Vorwärts*, den 19. Juni 1892.
41) 中山、前掲書、79-80頁。
42) [Parvus], a. a. O.
43) [Parvus], "Die Situation in Rußland", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 2, S. 272.
44) [Parvus], "Der Schmerzenschrei eines russischen Reaktionär", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 1, S. 568.
45) [Parvus], "Die Lage in Rußland III. Das Zarentum".

46) 佐々木照央「帝政ロシアの自由と飢饉」『ロシア史研究』36号（1982年）26-27、35頁。
47) Haimson, *op. cit.*, p. 50.「人民の権利」党については、稲掛久雄「『人民の権利』党をめぐって」『スラヴ研究』№32（1985年）。
48) [Parvus], a. a. O.
49) [Parvus], 'Die Situation in Rußland", S. 270-271.
50) h[Parvus], "Aus einem Lande der ursprürglicher Akkumulation (Sibirien)", *Neue Zeit*, 1893/94, Bd. 1, S. 247-249.
51) [Parvus], "Die Sozialdemokratie in Rußland", *Vorwärts*, den 23. September 1892.
52) Ebenda.
53) 後進国における基礎過程とプロレタリア階級意識の不均等的発展の認識は、プレハーノフも重視した点であり、この認識が永続革命論の礎石を提供したとされる。田中真晴、前掲書、64-65頁。
54) 同書、62-64頁。
55) 和田、前掲論文、151-152頁。
56) 中山、前掲書、32頁。
57) [Parvus], "Die Lage in Rußland IV. Folgen für Europa", *Vorwärts*, den 21. Juni 1892.
58) Ebenda.
59) Ebenda.
60) Scharlau, a. a. O., S. 166.
61) Парвус, "Война и революция IV. Самодержавие и реформы", *Искра*, № 82, 1-го января 1905г.
62) Парвус, "Итоги и перспективы", *Искра*, № 85, 27-го января 1905г.
63) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".
64) 田中真晴、前掲書、56-57頁。
65) Peter Lösche, *Der Bolschewismus im Urteil der deutschen Sozialdemokratie 1903-1920* (Berlin. 1967), S. 20-21.
66) 和田春樹『マルクス・エンゲルスと革命ロシア』（勁草書房、1975年）305-306頁。
67) 同書、289-290頁。
68) 佐々木照央「『社会主義文献フォンド』小史」『スラヴ研究』№34（1987年）6頁。
69) [Parvus], "Die Sozialdemokratie in Rußland".
70) Ebenda.
71) 小島定、前掲「プレハーノフの飢饉論(一)」115頁。
72) [Parvus], a. a. O.
73) シャルラウ、ゼーマン、前掲書、35頁。
74) これについては、淡路憲治『マルクスの後進国革命像』（未来社、1971年）53-61頁。
75) Winfried B. Scharlau, "Parvus und Trockij: 1904-1914 Ein Beitrag zur Theorie der permanenten Revolution", *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, vol. 10 (1962), S. 351-352.